

イランの過去・現在・未来

湘南高校 小林 克 則

一、はじめに

歴史分科会の海外史跡踏査委員会のイラン研修旅行（古代ペルシヤ帝国とイラン・イスラム文化の史跡を尋ねて）は、二〇〇〇年七月二四日から八月七日まで、二週間にわたって私を含め一四人の参加で実施された。その成果は「第一二回海外史跡踏査報告書」に詳しく、また本書に植田海外史跡踏査委員長の旅行記があるので参照してほしい。ここでは、私がこの研修旅行で触発されたこと、およびそれに基づいて調べたことの一部を焦点をしばって報告したい。

二、イランの地名・人名の表記について

現在の日本の教科書や地図帳の表記と、現地での発音がかなり違うことに気付いた。現地では、イスファハーンが「エスファハン」、詩人のハーフィズが「ハーフェズ」のように、イがエとなっているものが多い。また、Q音は濁音となっていて、コムは「ゴム」、カージャー朝は「ガージャール朝」と発音する。日本の一般的表記は、欧米の研究をおしたためだろうか。アラビア語の影響を受けているからだろうか。若手のイラン史研究者では、現地の発音を使うようになってきているとのこと。

古代・中世の表記は、史料がヘロドトスの『歴史』などギリシア語やラテン語のものが多かったためか、その表記や英語化された表記が日本でも使われてきた。しかし、最近の研究者は、アカイメネ

ス（アケメネス）を「ハカーマニシュ」、ダレイオス（ダリウス）を「ダーラヤワウ」のように、イラン風表記を主としているようである。

三、エラム文明のこと

この旅では、ユネスコの世界遺産に指定された三つの遺跡を訪れた。チョガー・ザンビール、ペルセポリス、イスファハーンのイマーム（エマーム）広場である。順次、それにまつわる話をしたい。

三者のなかで最古の遺跡は、スサ遺跡に近いところにある紀元前一三世紀に建設されたエラム人のジググラト（聖塔）であるチョガー・ザンビールである。チョガーとは現地の言葉で「さかさま」「棗椰子の実を盛った」、ザンビールとは「藁の皿」「ものいれ」という意味だそうで、その形状から名付けられたと思われる。底辺が一〇五メートル四方の大きさで、高さは往時は五〇メートル（現在はその半分）もあったという。焼き煉瓦と日干し煉瓦でつくられ、煉瓦の一部にエラムの楔形文字が残っていた。修築中のため中に入つて上部に登れないのが残念だったが、周囲を巡つてその古代的雰囲気を楽しんだ。回りは平坦な平野で、あちこちに遺跡の堆積であるタペ（またはテペ。アラビア語ではテル）がある。そのあと、「七つの丘」を意味するハフトタペを見学した。やはりエラム人の古い都で、3人の王の墓が発掘されているのを見た。他は、茫茫たる土のうねりがあるばかりで、まばらに草がはえていて、まさしく「つわものどもが夢のあと」であった。

さて、スサはエラム王国の首都であり、昨年ルーヴル美術館から日本にやってきたハンムラビ法典の発見地として名高い。それは、

エラム人がバビロニアから戦利品として持ち帰ったものらしい。スサを発掘したフランス隊が建設したという大きなヨーロッパ中世風の石造りの城が、スサ遺跡のそばにそびえていた。ハンムラビ法典の発掘場所にはいけなかったが、広く深く掘り進んだ底のほうに、往時の建物の区画が確認できた。そのとなりの小高いところに、のちにダレイオス一世が築いた宮殿跡が堂々と広がる。ペルセポリスのように柱や柱頭などの遺物があまり残っていないのが、世界遺産からはずれた理由のように思われるが、世界的にははるかに重要な地である。

エラム文明については、世界史教科書ではほとんど取り上げられていない。しかし、アケメネス朝に先行するイランの古代文明としてもっと評価されてよいと、この旅を通して感じた。エラム人は、シュメール人と同じく言語系統が不明の民族であるが、古くから楔形文字を用いて記録を残している。それは解読されており、エラムの歴史や社会・宗教、高度な文化が知られている。テヘランの考古学博物館には、エラム文明の遺物が多く展示されている。エラム人は、アッシリアのアッシュルバニパル王により壊滅的な打撃を受け、その後、紀元前七世紀末までにインド・ヨーロッパ系のメディア王国の支配下にはいつて独立を失った。しかし、エラムのすぐれた行政制度は、メディア王国およびアケメネス朝ペルシア帝国に採用され、エラム語は公用語の一つとしてアケメネス朝の中期まで用いられた。エラム人は、多民族国家ペルシア帝国の官僚として、権力の中枢で活躍したらしい。ビストウン（ベヒスタン／ベヒストゥーン）のダレイオス一世の碑文は、初めエラム語で書かれ、のちに浮き彫りの追刻のときにアッカド語（バビロニア語）と古代ペルシア語が

付加されたという。今回、ビストウンに行つて、碑文の下まで登つたが、修復中のためほとんど見えなくて残念であった。

四、ゾロアスター教のこと

ペルセポリスは、ペトラ、パルミラと並ぶ「中東の3P」と言われる遺跡だけあって、さすがに堂々たるものであった。ダレイオス一世が建設を開始したペルセポリス（ギリシア語でペルシアの町の意。当時のペルシア名は不明。イランでは一般にタフテ・ジャムシードとよばれる。伝説の王ジャムシードの玉座の意）は、アレクサンドロスが占領したときまで建設が継続中であった。未完成の大きな馬の形の門が残されていて、それと分かる。ペルセポリスの用途は、新年の祝いをする春の宮殿という説があるが、それにふさわしい豪華さであった。

ペルセポリスの石壁のあちこちに人物付きの有翼円盤の浮き彫りがある。同じ人物像付き有翼円盤は、ヤズドの現在使われている新しいゾロアスター教寺院の入り口の柱の上に浮き彫りにされていた。勤務先の高校で使っている世界史図表では善神アフラ・マズダの像とされていたので、そうだとばかり思っていたが、イラン人がイドのアリーさんが、あれはアフラ・マズダの心霊であつて、ファルヴァールというと教えてくれた。

帰国して、以前読んだ中央公論社の『世界の歴史』4を読みかえすと、「一九世紀以来、これ（有翼円盤）はペルシア人の神であるアフラ・マズダーを描いていると解釈するものが多かった。しかしアケメネス朝の史料には、この図像がアフラ・マズダーであることを示すようなものは一切ない。この図像はアケメネス朝以降次第に

使われなくなり、サーサーン朝ではまったくみられなくなる。一九世紀以降に建てられた寺院や公共の建物には、アケメネス朝の意匠として再びこの有翼円盤が描かれるようになるが、ゾロアスター教徒はアフラ・マズダーの像と呼ぶことはなく、先祖の霊であるフラワフルと呼ぶことが多い。ヘロドトスがペルシア人は寺院も建てず神像ももたないといっていることからしても、アケメネス朝初期にアフラ・マズダーの姿が描かれたとは考えにくい。」と書いてあった。先入観にとらわれ、一度読んだだけでは身につけていないことを思い知らされた。

さて、ではアフラ・マズダーの像はどんなものなのか。ケルマンシャー市の北郊に、ターゲ・ボスタン（「楽園のアーチ」の意）と呼ばれるササン朝時代の遺跡がある。三つの美しいレリーフが岩壁に残っているが、そのうち二つは、ホスロー二世とアルデシール二世の叙任式であり、いずれもアフラ・マズダーが王権の象徴である光輪を渡している場面である。アフワーズからケルマンシャーまで、ザグロス山脈をバスで数百キロメートルも北上して、ふらふらになってたどり着いたので、記憶も定かではないのだが、アフラ・マズダー像は人間の王者の姿で描かれていた。説明がないと人間と区別がつかない。前掲書にアルデシール一世の叙任式のレリーフの写真がのっているが、右の像がアフラ・マズダーとされる。

ヤズドのゾロアスター教寺院には、ガラスの大きな窓の奥に、一五〇〇年前から燃え続けているという聖火がほのみえるが、アフラ・マズダーの像はない。かわりに、ゾロアスターの絵像があったが、前掲書にあった挿絵と全く同じもので、一九世紀末インドでつくられた想像図だそうである。

もう一つ、図表の図解と違う発見は、ヤズドの郊外にあった「沈黙の塔」（ダフメ）の内部構造である。図表では、鳥葬の場である「沈黙の塔」の内部は、中央の大きな穴に向かって傾斜しているが、実際は穴はそれほど大きくはなく、内部も平面であった。パフレヴィー朝が鳥葬を禁止したため、現在は使われていない。そのそばに現在のゾロアスター教徒のための土葬墓地があった。また、図表や前掲書にあるゾロアスター教の拜火壇とされるナクシエ・ロスタムの近くの二つの石造物は、ガイドのアリーさんがいうには、ゾロアスター教の僧侶であるマギの墓であるとのこと。

最後に、ゾロアスター（ザラトウシュトゥラ）の活動の時期であるが、いままでは前七世紀頃とされてきた。しかし、前掲書などでは、紀元前一〇〇〇年以前と年代を繰り上げるべきだとしている。岩波講座『世界歴史二』の春田晴朗論文では、「紀元前一〇〇〇年の前後数百年間に、アフガニスタン、イラン最東部を含む中央アジア西部のどこかで成立したとしておくのが安全であろう」として、曖昧にしてあるが、ゾロアスター教成立の年代を生徒に教える場合、今後は注意が必要となるであろう。

五、アッバース一世のこと

三番目の世界遺産は、イスファハーンの「エマーム（イマーム）広場」である。別名「ナグシエ・ジャハーン（全世界の図）広場」といい、ホメイニ革命以前は、「王の広場」といわれた。「イスファハーン・ネスフェ・ジャハーン（イスファハーンは世界の半分）」という言葉があるくらい美しい町の、そのまた中心をなすメイダーン（広場）である。この広場は、一六世紀末にイスファハーンに遷

都した、サファヴィー朝の第五代国王アッバース一世が建設を始めたものであり、回廊をめぐらし、周囲にマスジェド（モスク）や宮殿を配した広大な広場である。最近つくられたという大きな浅い池では、子供たちが水遊びをしていた。

ところで、報告したいのはこの広場の観光案内ではなく、アッバース一世の墓についてである。ササン朝以来のイランの民族国家であるサファヴィー朝の最盛期の王である彼の墓は、イスファハーンにあつてさぞかし立派なものであるうと思つていたのだが、そうではなかつた。鎌倉で、源頼朝の墓と伝えられている小さな墓を見たときの気分であつた。アッバース一世の墓は、カシャーニという小さな町にある。カシャーニは、テヘランとイスファハーンの間にある、キャヴィール砂漠の東の端のオアシス都市であり、サファヴィー朝の王たちに愛された町として知られているのである。ここにハビーブ・エブネ・ムーサー廟というモスクのような建物があり、その入り口の左側に、横たわつた形の長方形の石の墓標があつた。それは石棺ではなく墓標であり、その地下にアッバース一世の遺体が安置されているのである。墓標にはアラビア文字でいろいろ書かれていたが、質素なもので、廟の中央にある聖者（ハビーブ・エブネ・ムーサー）の墓のほうが立派であつた。権力を相対化する、イスラームの信仰の一端を見た気がした。

六、イランの三大詩人

今回の旅では、イランの三大詩人の廟を全て訪れた。イランは詩の盛んな地で、現在も民衆の中に息づいているのである。ガイドのアーリーさんも、ときどき詩をつくるようで、私たちに即興の詩を

作つて贈つてくれた。イランの詩は、各国の文明に大きく影響していて有名である。多くの教科書で取り上げられ、私も好きな『ルバイヤート』の作者オマル・ハイヤームは、七大詩人には入つてゐるが、三大詩人には入つてゐない。彼がとりわけ有名なのは、フィッツジェラルド訳で欧米でもはやされたからであろうか。

三大詩人を古い方から紹介したい。まずフィルドゥシー（フェルドゥスイー）であるが、彼はガズナ朝の詩人で、イランの神話と伝説を主とする英雄叙事詩『シャー・ナーメ』（王書）の作者として知られる。彼はイスラム教徒ではあつたが、『シャー・ナーメ』では善悪二神の対立と善の勝利というゾロアスター教的モチーフと、祖国イランに対する愛国心が全編にみながつていると言われる。パフレヴィー朝で民族的精神が高揚すると、フィルドゥシーへの評価も高まつた。現在でもイラン各地の町で、広場や通りに彼の名が付けられていたし、像も立てられていた。イラン東部の大都市マシャドの近郊のトゥースという町が彼の生誕地であり、彼の靈廟が没後一〇〇〇年を記念してこの地に建てられた。再建された現在の靈廟は、堂々たる大理石の四角い建物で、壁には『シャー・ナーメ』の詩句が書かれている。内部はがらんどうで、中央にアッバース一世のものより立派な石造の墓標があり、壁面にはトルコ人と戦つた伝説の英雄ロスタムやササン朝のホスロー一世の物語のレリーフが描かれている。叙事詩人の靈廟らしい建築であつた。

さて、ペルセポリスに近い「ナクシエ・ロスタム」とは、この『シャー・ナーメ』の英雄「ロスタムの絵」の意味である。もともとナクシエ・ロスタムは、ダレイオス一世やクセルクセス一世などアケメネス朝の諸王の墓が岩壁に十字型に掘り込まれた地であつ

た。そこに、アケメネス朝の後継を任ずるサーサーン朝の諸王がレリーフを刻んだのである。最も有名なものが、シャープール一世がローマ皇帝ヴァレリアヌスを捕虜にしたことを記念する「騎馬戦勝図」であり、ほとんどの世界史図表に載っている。後世の人が、このレリーフを英雄ロスタムの絵と思ったのであろう。

三大詩人の二人目は、アッバース朝からイル・ハン国時代の詩人サーデーイ（サアデーイ）である。『果樹園（ブースターン）』、『薔薇園（ゴレスターン）』は、散文と詩によって、彼の長い放浪中の見聞、昔話、逸話、冒険談などを語り、実践道徳について語ったものである。サーデーイは、ファールス地方のシーラーズの生まれで、この地で死んだ。彼の現在の廟は、広い公園のような敷地の中に、最近つくられた青いドームを持つ小さなかわいらしい建物である。狭い内部の中央に、フィルドウシーのものと同じ石棺のような墓標があり、回りのタイルの壁面にサーデーイの詩句が書かれていた。その詩句はもちろん美しいアラビア文字で書かれているのだが、脚韻を踏んでいるのが文字の形から理解できた。

三大詩人の三人目は、イル・ハン国からティムール帝国時代の詩人ハーフィズ（ハーフェズ）である。彼もシーラーズに生まれ、その廟もシーラーズにある。ハーフィズとは「コーランの暗記者」の意で、本名はシャムス・ウッディーン・ムハンマドという。神秘的な恋愛詩を歌い、インド、中央アジア、トルコなどでも愛唱され、ゲートルもそのドイツ語訳を読んで感激し『西東詩集』を著したという。イラン人の中で最も愛された詩人といわれているが、シーラーズでガイドをしてくれた大学院生の女性も、ハーフィズが一番好きだと言っていた。彼の廟は、八本の柱で支えられたあずま屋風の建

物で、墓標は外から見える形になっていた。広い回廊に囲まれた庭園の中にあり、叙情詩人の廟らしく優美であって、多くのイラン人たちが訪れていた。

七、イランの現在と未来

パレヴィー朝を倒したイスラーム革命から二〇年以上が経過した。ホメイニ師はなくなり、彼とその息子の広大な廟が、テヘランの南郊に建設されている。宿泊所は建築中であった。新しい聖地のおもむきである。コムやマシユハドなどの聖者の廟は、異教徒を入れない所が多かったが、ホメイニ廟には入ることができた。なお、モロッコではモスクに異教徒は入れなかったが、イランではモスクは礼拝のとき以外は入ることができた。

ハタミ大統領のもとで自由化が進んでいるとはいえ、禁酒と女性のヘジャブは外国人にも厳しく強制されている。イラン・イラク戦争が終わって、一〇年ほど前から人口抑制策がとられるようになってきているそうだが、戦争当時の人口増加率は三パーセントで、この二〇年で人口はほぼ倍増して六〇〇〇万人を越えるにいたった。革命を知らない若者が人口の半分を占める。アメリカ合衆国の経済制裁が続くなかで、インフレーションが進行し、この二年で通貨のリアル価値は半減した。道路建設は進んでいるが、どこの都市でも激しい交通渋滞がある。最高宗教指導者ハメネイ師を中心にする保守派は、イスラーム革命の規律の緩みに反発している。保守派と改革派のせめぎあいによく報道されているところである。イランの今後は予断を許さないが、若者に職を与え、閉塞感を突破できなければ、また一波乱あるような気がする。それが、イスラーム革命の

強化にいたるのか、世俗化が進むのか、今は即断できないが。

〈参考文献〉

『世界国勢図会』

国勢社 二〇〇〇

『ミリオーネ全世界事典 七』

学習研究社 一九八〇

『地球の歩き方 イラン』 ダイヤモンド・ビッグ社 一九九八

小川英雄・山本由美子『世界の歴史 四』

中央公論社 一九九七

山本由美子『マニ教とゾロアスター教』

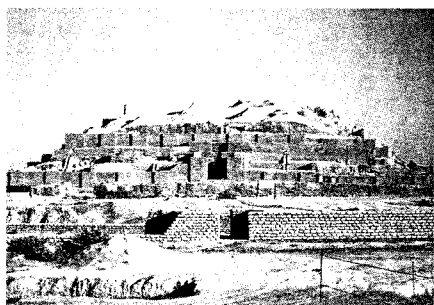
山川出版社 一九九八

『岩波講座 世界歴史 二 オリエント世界』

岩波書店 一九九八

山崎秀司編『図説 ペルシア』

河出書房新社 一九九八



スサ近くのチヨガー・ザンビール



ゾロアスター教寺院の屋根の上 有翼円盤 (ヤズド)



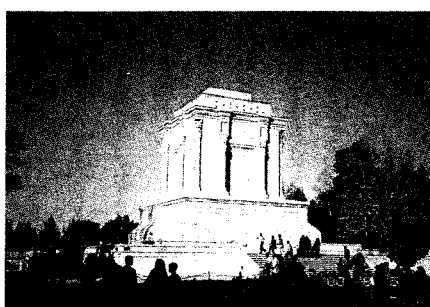
ヤズドのダフメ (沈黙の塔)



カシャーンのアッパース1世の墓標



ササン朝「レリーフ」前の集合写真



トウースのフィルドゥシー廟